

まことの保育の願い

なかよくする 子どもを育てる

**おやくそくやルールを守ることの大切さを知り、
一緒に遊ぶことの楽しさを味わう**

なかよくするって、どういうことなのでしょう？

それは、相手の存在を認識することではないでしょうか。自分は一人だけで生きているのではなく、いつもまわりには誰かがいる、誰かと一緒に遊んでいる、ということに気付くことだと思います。

子どもは成長するにつれて、一人だけで遊ぶのが物足りなくなつてきます。お友だちと関わり、関係を持つて遊ぶことに本当の楽しさを見出します。そこに「ともに育ち合う」という関係性が生じてきます。

たとえば、子どもたちが一緒に「おままごと」をしている時に、顔と顔を見合わせてほほえんでいる姿、これがともに育ち合う姿だと思います。ありふれた姿なのですが、実はその時々に子どもの中に、楽しさや嬉しさが共有されていきます。一緒になつてやつていることを楽しむうちに、お友だちとながつてしていることに気付いていきます。つまり関係性の中で生かされている自分で気付いていくのです。

さらに広がつて信頼できる大人、家族や担任の先生、そしてクラスのお友だちと一緒になつて五感を通じた体験を共にしていく。体験の共有と感情の共有の二つが相絡み合つていくこと、それが「共に育ち合う」ことになるのです。多くのいのちのつながりの中で、自分のいのちが生かされていることに気付く。するとそこに相手を「思いやる心」や「気遣う心」「敬う心」が育つていくのではないでしようか。

お友だちだけではありません。私たちは多くの生き物と一緒になつて遊びます。仲よく楽しく遊んでいる間はいいのですが、次第に飽きてくると、その生き物を簡単に捨てたり殺したりしてしまいます。私たち大人でも命は尊いと口では言っていますが、それをきちんと自覚しているかといえば、とてもその自信はありません。

人間は生きしていくために、牛や豚、魚など生きている物のいのちを殺してそれを食しています。殺さなければ生きていけないので。虫に刺されるとかゆいから、痛いから、殺してしまいます。さらにはイヤだなと思うことは拒否して、自分の思い通りにしてしまいます。そのように命だけでなく、さまざまな人の考え方や思いも犠牲にして生きているのではないでしようか。

しかも日々の生活の中ではこのようなことに気がつかず、不平不満を言つたり、自己中心的な考え方やエゴイズムの中に生きているのが私たちの今の姿ではないでしようか。

しかし、子どもは共に体験し共に感じ合うことにより、お友だちのいのちも自分のいのちもかけがえのない大切なものです。さらに自分は無条件に生きていていいのだ、と子ども自身が確認できるようになります。

自分自身のいのちが大切だと思えると、他者を傷つけたりすることもなくなります。他者を傷つけることは、自分の心を傷つけることになるからです。自分のいのちは何よりも大切だと思えるような子どもを育てていくことは、自分勝手で自己中心的な思いやりのない子を育てることではないのです。

そのことに一番早くたどり着けるのは、「ともに育ち合う」中からのことです。なかよくお友だちと遊んでいる姿の中に、命の尊さへの気付き、そして思いやりの心が育つていくのです。

（保育連盟教育原理委員会委員・土山雅之）